須玖岡本遺跡 7

－盤石地区３・６次調査の報告－

福岡県春日市岡本所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書　第 81 集

２０１９

春 日 市 教 育 委 員 会

須玖岡本遺跡 7

－盤石地区３・６次調査の報告－

福岡県春日市岡本所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書　第 81 集

２区調査区全景（上が北）

平瓦・軒丸瓦

序

福岡平野の南部に位置する春日市は、福岡市のベットタウンとして昭和50年代から住宅都市として発展してきました。現在は人口約11万人前後で推移し、住宅都市として安定期を迎えています。

本市が所在する福岡平野は、古くから中国大陸や朝鮮半島との交流の玄関口として栄えてきました。なかでも、春日市の中央にある春日丘陵北部とその一帯には弥生時代の遺跡が数多く、中国の歴史書にみえる「奴国」の中心地であったとされています。特に須玖岡本遺跡は福岡平野のみならず、弥生時代を代表する遺跡として有名です。

須玖岡本遺跡は1899（明治32）年に厚葬墓が発見され、広く世に知られることとなり、1929（昭和4）年に京都帝国大学による発掘調査が行われました。考古学史上でも重要な遺跡ですが、住環境としての立地の良さから宅地化が進みました。その後、九州大学、福岡県教育委員会、春日市教育委員会より発掘調査が行われ、有力者層の墳墓や青銅器工房等、遺跡の性格が明らかとなってきました。この須玖岡本遺跡の保護と住宅地としての地域との共存を図るため、春日市教育委員会では「史跡　須玖岡本遺跡保存活用計画」を策定し、住宅地の中で遺跡を活かす方策に取り組んでいます。

本書は、平成13、18年度に発掘調査を実施した須玖岡本遺跡盤石地区3・6次調査の発掘調査報告書です。須玖岡本遺跡は弥生時代を代表する遺跡としてよく知られていますが、盤石地区3・6次調査では、主に7世紀頃の掘立柱建物跡等が確認されました。これらの建物跡は官道を見下ろす位置にあり、奴国として栄えた弥生時代以降も、地理的に主要な位置にあったことがうかがえます。

本書が埋蔵文化財の保護に対する理解と、地域の遺跡を通して歴史文化の学習を深める資料として広く活用され、市民の郷土春日に対する理解や愛着につながることとなれば幸いです。

最後ではありますが、発掘調査ならびに報告書作成作業に際して多くの方々の御理解と御協力をいただきました。記して心から謝意を表します。

平成31年3月31日

春日市教育委員会

教育長　山　本　直　俊

例　言

1　本書は春日市教育委員会が2002年2月4日から同年3月29日にかけて実施した須玖須玖岡本遺跡盤石地区3次調査と、2006年10月23日から同年11月10日にかけて実施した同遺跡盤石地区6次調査の報告書である。これらの調査は、前者は国指定史跡須玖岡本遺跡の保存のための重要遺構確認調査で、国県補助を受けて実施した。後者は史跡指定後の対象地の環境整備に関わる、史跡の現状変更許可による確認調査として実施した。

2　遺構の実測は中村昇平が行い、製図は水上愛子、柏木千恵、堤りかが行った。

3　遺物の実測、製図は山崎悠郁子、末田恵子、久家春美、竹田祐子、吉富千春、中村が行った。

4　掲載写真のうち、遺構については中村が撮影し、遺物については、岡紀久夫（文化財写真工房）、西村新二（(株）タクト）に委託した。なお、空中写真については、(有）空中写真企画による。

5　本書に使用した2万5千分の1の地形図は、国土地理院発行の『福岡南部』である。

6　本書の遺構実測図に用いた方位は座標北である。

7　発掘調査は須玖岡本遺跡18次調査として実施したが、平成14年度に同遺跡内で4地区にわけて呼び分けることとし、平成19年度に地区毎に次数整理を行った。これにより、「須玖岡本遺跡18次調査」(註1）は「須玖岡本遺跡盤石地区3次調査」、「平成18年度実施の確認調査」(註2）は「須玖岡本遺跡盤石地区6次調査」に名称変更した。

8　本書の執筆はⅢ－3－(2）遺物のうち瓦を山崎、その他は中村、森井が行い、編集は中村が行った。

9　発掘調査の際に下記の方々に御指導、御教示を賜りました。記して感謝の意を表します。

磯　望（西南学院大学教授）、石松好雄（下関市立考古博物館館長）

註1　中村昇平　2003「6　須玖岡本遺跡（18次調査）」『春日市埋蔵文化財年報10』春日市教育員会

註2　中村昇平　2008「11　須玖岡本遺跡盤石地区　確認調査」『春日市埋蔵文化財年報15』春日市教育委員会

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
1　調査に至る経過 …… 1
2　調査の組織 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 3
Ⅲ　調査の内容 …… 6
1　3次調査 …… 6
2　6次調査 …… 7
3　遺構 …… 7
（1）掘立柱建物跡 …… 7
（2）溝状遺構 …… 12
4　出土遺物 …… 18
（1）瓦 …… 18
（2）土器 …… 33
（3）陶磁器 …… 33
（4）石器 …… 33
（5）ガラス製品 …… 33
（6）土製品 …… 33
Ⅳ まとめ …… 34

図　版　目　次

巻頭図版１　２区調査区全景（上が北）

巻頭図版２　平瓦・軒丸瓦

図版１　調査区全景（上が北西）

図版２（１）１区調査区東壁土層（北西から）

（２）１区上層面（南西から）

（３）３区調査区（南西から）

図版３（１）４区調査区全景（北西から）

（２）２号掘立柱建物跡Ｐ３（東から）

（３）２号掘立柱建物跡Ｐ２土層状況（南東から）

（４）２号掘立柱建物跡Ｐ１土層状況（東から）

（５）２号掘立柱建物跡Ｐ５土層状況（北東から）

図版４（１）２号掘立柱建物跡Ｐ４土層状況（北東から）

（２）２号掘立柱建物跡Ｐ６土層状況（北東から）

（３）４区拡張前調査区西壁土層（南東から）

（４）５区調査区全景（上が北東）

図版５（１）２区南側延長トレンチ東壁土層（北から）

（２）１号掘立柱建物跡Ｐ１（北東から）

（３）１号掘立柱建物跡Ｐ１掘方半截土層状況（南東から）

（４）１号掘立柱建物跡Ｐ４（北東から）

（５）１号掘立柱建物跡Ｐ４掘方半截土層状況１（南東から）

（６）１号掘立柱建物跡Ｐ４掘方半截土層状況２（南東から）

（７）１号掘立柱建物跡Ｐ４掘方半截状況（北東から）

図版６（１）６区南側調査区全景（北西から）

（２）７区度北側調査区全景（北西から）

（３）７区北側調査区東壁土層（北西から）

図版７　平瓦１

図版８　平瓦２

図版９　平瓦３

図版 10　平瓦４

図版 11　平瓦５

図版 12　平瓦６

図版 13　平瓦７

図版 14　丸瓦・軒丸瓦
図版 15　軒丸瓦
図版 16　土器・陶磁器
図版 17　陶磁器・石器・ガラス小玉

挿　図　目　次

第 1 図　須玖岡本遺跡盤石地区周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 4
第 2 図　須玖岡本遺跡盤石地区 3 ・ 6 次調査位置図（1/2,500）…… 5
第 3 図　須玖岡本遺跡盤石地区 3 ・ 6 次調査遺構配置図（1/200）…… 8
第 4 図　1 号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 9
第 5 図　2 号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 10
第 6 図　土層断面実測図①（1/40）…… 11
第 7 図　土層断面実測図②（1/40）…… 12
第 8 図　土層断面実測図③（1/40）…… 13
第 9 図　土層断面実測図④（1/40）…… 15
第 10 図　平瓦実測図①（1/4）…… 17
第 11 図　平瓦実測図②（1/4）…… 18
第 12 図　平瓦実測図③（1/4）…… 19
第 13 図　平瓦実測図④（1/4）…… 20
第 14 図　平瓦実測図⑤（1/4）…… 21
第 15 図　平瓦実測図⑥（1/4）…… 22
第 16 図　平瓦実測図⑦（1/4）…… 23
第 17 図　平瓦実測図⑧（1/4）…… 24
第 18 図　平瓦実測図⑨（1/4）…… 25
第 19 図　平瓦実測図⑩（1/4）…… 26
第 20 図　平瓦実測図⑪（1/4）…… 27
第 21 図　平瓦実測図⑫（1/4）…… 28
第 22 図　丸瓦実測図①（1/4）…… 29
第 23 図　軒丸瓦実測図①（1/4）…… 30
第 24 図　軒丸瓦実測図②（1/4）…… 31
第 25 図　土器・陶磁器・石器・ガラス小玉・土製品実測図（1/1・1/2・1/3・1/4）…… 32

Ⅰ はじめに

1　調査に至る経過

須玖岡本遺跡は福岡平野の南奥に位置する春日市の北部に所在する遺跡である。脊振山地北東部の牛頸山（標高 448 m）から派生し、福岡平野中央に突出する春日丘陵北端の低台地上に立地する。この春日丘陵北半部から北側の低地にかけての南北約 2 ㎞、東西約 1 ㎞の範囲には、弥生時代中期から後期の遺跡が密集して大規模な遺跡群を形成しており、これらを須玖遺跡群と称している。須玖岡本遺跡はこの遺跡群の中心的存在であり、明治 32 年に発見された奴国王墓をはじめ、これに隣接する王族墓群、弥生時代最大規模の青銅器工房群等を擁する重要遺跡である。遺跡の範囲は大部分が住宅地化しているが、昭和 61 年に一部が国の史跡に指定されて以来、少しずつではあるが史跡指定地を拡充させるとともに遺跡の保存を進めている。平成 29 年度には、「史跡　須玖岡本遺跡保存活用計画」を策定し、史跡の保護と活用を図っているところである。

今回報告する須玖岡本遺跡盤石地区 3・6 次調査地点は、二次にわたる発掘調査を行った。3 次調査は、平成 13 年度に史跡須玖岡本遺跡の追加指定を図る目的で、重要遺跡の範囲確認調査を行なった。調査期間は、平成 14 年（2002 年）2 月 4 日から 3 月 29 日までである。調査成果に基づき、平成 14 年 12 月 8 日に史跡の追加指定を受けた。また、6 次調査は、平成 18 年度に同地点の南東側史跡境界が落差 4 m 以上の崖面となっているため、文化庁及び福岡県教育委員会との協議に基づき、崩壊防止のための環境整備工事の計画、施工に先立ち、史跡地の現状変更許可を得て、追加の確認調査を実施した。調査期間は、平成 18 年（2006 年）10 月 23 日から 11 月 10 日までである。

同調査地点は、従前の周辺での発掘調査成果から、近接する熊野神社周辺で確認されている弥生時代中期以降の甕棺墓等の墳墓域が東側に伸びてくることを予測していたが、弥生時代の墳墓等の確実な遺構は確認するに至らなかった。一方で、確認された遺構は、百済系単弁の軒丸瓦を含む古瓦類を伴う 2 棟の建物遺構であった。出土古瓦類は、これまでにも須玖岡本遺跡地内の各所から出土するものと通有の特徴をもつ資料であり、かつ、北部九州の所謂大宰府Ⅰ期に伴う瓦の特徴を有する資料であることから、同遺構は官衙関連の遺構の可能性を有していると推定できる。このことは、同史跡の本質的価値の中でも最も枢要な弥生時代の遺構では無いにせよ、飛鳥時代の重要な遺構を内包していることが確認されたことになる。

2　調査の組織

発掘調査を実施した平成 13・18 年度、報告書刊行の最終的作業を行った平成 30 年度における春日市教育委員会の体制は下記の通りである。

平成 13 年度　須玖岡本遺跡盤石地区 3 次調査

教　育　長　河鍋　好一

社会教育部長　岡本　彰夫
文化財課長　御厨　國生
管理担当係長　古賀　俊光
　事務主査　横枕　博（7月～）
　事務主査　白水　富士子
　事務主任　十時　弘之
　事務主任　吉田　佳広
　嘱託職員　池田　正大

文化財担当係長　丸山　康晴
　技術主査　平田　定幸（～6月）
　技術主査　中村　昇平
　技術主任　森井　千賀子
　技術主任　境　靖紀
　技術主任　井上　義也
　嘱託職員　松尾　尚哉

平成18年度　須玖岡本遺跡盤石地区6次調査
教育長　山本　直俊
社会教育部長　鬼倉　芳丸
文化財課長　結城　保雄
管理担当係長　戸渡　隆
　事務主査　柚木　泰
　事務主査　塩足　雅弘

文化財担当係長　丸山　康晴
　技術主査　中村　昇平
　技術主査　吉田　佳広
　技術主任　森井　千賀子
　技術主任　境　靖紀
　技術主任　井上　義也（～6月）
　嘱託職員　吉田　浩之
　嘱託職員　長谷部　真弓

平成30年度　報告書作成
教育長　山本　直俊
教育部長　神田　芳樹
文化財課長　神埼　由美
整備活用担当　課長補佐　小林　達朗
　主査　森井　千賀子
　主査　大原　佳瑞重
　主査　飛永　宗俊（7月～）
　主任　佐伯　廣宜（～6月）
　嘱託　矢越　敏治

調査保存担当　課長補佐　中村　昇平
　主査　吉田　佳広
　主査　井上　義也
　主任　山崎　悠郁子
　主事　熊埜御堂　早和子
　嘱託　川村　博
　嘱託　尾方　禎莉
　嘱託　種生　優美

Ⅱ　位置と環境

当地は地形的には牛頸山から派生する春日丘陵の北端にあって、東向きの緩斜面にあたり、標高26～30ｍを測る。発掘調査前の現況は２段に造成された畑地であった。

当地周辺の地質は早良型花崗岩で形成されており、花崗岩が侵食された真砂土が地表面でみられる。調査地点は凹面に火山灰が厚く堆積し、この火山灰が団塊状に固まり侵食されずに溜まったため、地山は団塊状の火山灰により斑状を呈し、周囲とは異なる特異な様相を示している。

春日丘陵上とその周辺には遺跡が多く、中でも弥生時代は春日丘陵上から北側の低地にかけて、中期から後期の遺跡が東西約1km、南北約2kmの範囲に密集する。これらの遺跡を須玖遺跡群というが、中でも須玖岡本遺跡は、王墓の発見や副葬品を高い比率で有する有力者層の墓があり、当時の最先端技術を有する青銅器生産工房跡が集中してみられ、当時の有力なクニである奴国の中心地とされる。

古墳時代になると那珂川の河岸段丘上に野藤古墳、日拝塚古墳、下白水大塚古墳等の前方後円墳が築かれ、観音山から牛頸山山麓にかけては群集墳がみられる。須玖岡本遺跡岡本山地区においても円墳１基が確認されている。この円墳は熊野神社本殿下にあり、周溝を確認したのみであるため、詳細は不明である。

また、６世紀以降に牛頸山山麓付近では須恵器生産が盛んになり、大野城市南部、太宰府市北西部、春日市南部にかけて広範囲に展開する。この古代でも有数の生産地である牛頸窯跡群は９世紀まで操業されるが、須恵器生産だけでなく瓦陶兼業窯もみられ、７世紀後半には本格的な瓦生産を行ったウトグチＢ遺跡も出現する。このウトグチＢ遺跡で造られた瓦と同じ文様の瓦が上白水地域で採集されているが、供給先となる寺院（白水廃寺）はまだ確認されていない。

７世紀後半には古代の大防衛線である水城跡が築かれ、先ノ原遺跡や春日公園内遺跡では官道が検出された。この官道は水城跡西門から鴻臚館の間を結ぶルートであるが、須玖岡本遺跡の東側を通過すると考えられる。官道推定ラインより東側の低平地にある上平田・天田遺跡では８世紀前半頃の水田が検出されている。上平田・天田遺跡がある低地東側の台地上にある雑餉隈遺跡、南八幡遺跡、麦野Ａ遺跡、麦野Ｂ遺跡では奈良時代の集落が確認されている。これらの集落では掘立柱建物跡群と竪穴住居跡群に大きくわけられ、掘立柱建物跡群の配置に規格性があることと、集落の存続期間がほぼ８世紀であり９世紀には継続しないと考えられることから、自然発生的な集落ではなく、政治的な集住による集落である可能性が指摘されている。

参考文献

宮井善朗編 1998 『雑餉隈遺跡４』福岡市埋蔵文化財調査報告書第569集　福岡市教育委員会
本田浩二郎編 2005 『中南部（８）』福岡市埋蔵文化財調査報告書第867集　福岡市教育委員会

1	井尻B遺跡群	2	麦野C遺跡群	3	麦野B遺跡群	4	南八幡遺跡群	5	中ノ原遺跡
6	雉餌限遺跡群	7	上平田・天田遺跡	8	須玖坂本B遺跡	**9**	**須玖岡本遺跡**	10	赤井手遺跡
11	飛奇遺跡	12	トバセ遺跡	13	原田C遺跡	14	石尺遺跡	15	ウトグチB遺跡
16	天神山水城跡	17	大土居水城跡	18	小倉水城跡	19	先ノ原遺跡	20	駿河D遺跡
21	原ノ口遺跡	22	春日公園内遺跡	23	春日水城跡	24	惣利北遺跡	25	九州大学・御供田遺跡
26	梅頭遺跡	27	本堂遺跡	28	上園遺跡	29	小水城周辺遺跡	30	上大利小水城跡
31	浦ノ原窯跡群								

第1図　須玖岡本遺跡盤石地区周辺遺跡分布図（1/25,000）

第２図　須玖岡本遺跡盤石地区３・６次調査位置図（1/2,500）

Ⅲ　調査の内容

1　3次調査（巻頭図版1、図版1～5、第3～9図）

Ⅰ-1で前述した通り、3次調査は史跡の追加指定に向けての重要遺構確認調査を行ったため、調査範囲は、対象地内の遺構の把握を必要最小限度に留める内容で実施した。

調査地点は、略東西に長い長方形の土地区画で、後世の土地活用の結果、東西で大きく二段の段状に成形されている。上位に当たる西側はさらに二段に造成されているので、全体としては、三段に段差がつく。史跡指定直前まで、全体が畑地として活用されていた。地形的には、もともと、南西から北東方向への緩やかな丘陵斜面である。対象地南西隅が標高30m前後で最も高所で、段々と北東隅の標高24m前後まで下がる。このうち、中断と下段との間は、比高差が約2mと大きい。対象地全体に1区～5区としてトレンチ乃至グリッドで調査区を設定して確認調査を行った。

1区は、対象地の最上段の部分で、当初、斜面にほぼ直交して幅1m、長さ5mでトレンチを設定し、その後西側に一部調査区を拡張した。表層の畑耕作土を下げると、深さ50～70cmで黄褐色粘質土乃至赤褐色砂土層で、小径のピット1基の掘り込みを確認した。さらに、深さ80～100cmで花崗岩、砂岩、珪岩の円礫混じりの赤褐色砂土層の地山に達した。調査の結果、小径のピット10基以上を確認した。主な出土遺物は、弥生土器小片である。

2区は、中段部分の西寄りに幅1mのトレンチを2カ所平行して設定して調査を行った。東側トレンチの掘り下げの途中で、古瓦片の塊と掘り込みのプランを確認したため、2本のトレンチを繋ぐ形で調査区を拡張し、また、その東側に3区を設定して調査を継続した。表層の畑耕作土を下げると、茶褐色土層が厚く堆積し、とくにその下層より下の褐色乃至暗褐色砂土層に少量であるが中世以降の遺物が含まれていた。深さ50cm程掘り下げると、古瓦片を含む一辺1m前後の方形プランの掘方が4基直線状に並んでいることを確認した。4基の掘方は、いずれも掘方のほぼ中央に、径0.5m程の範囲に古瓦片が密に出土した。4基のうち、2基は半截して調査を行った結果、古瓦は柱痕乃至柱の抜取り痕であり、柱間は3m前後で等間隔に配置されていると考えられる。さらに、3区の北東側に、幅1m、長さ3mのサブトレンチを設けて、列状に並ぶ掘方が建物等を構成する可能性がないか、2区の北側を拡張するのと同時に段落ちギリギリまで調査区を拡張した。しかし、列状に並ぶ掘方の確認に留まり、4基の掘方は一応柵列状の遺構として取り扱った。

4区は、下段東寄りの調査区として、幅1m、長さ5mの略東西方向のトレンチを設定して遺構の検出作業を行った。畑耕作土を20～30cm掘り下げると、一辺0.8m前後の略方形プランの掘方が3基並んでいることを確認した。そこで、東側及び北側に調査区を拡張したところ、2間×2間以上の掘立柱建物を確認した。

5区は、下段の西寄りで約4m四方の調査区を設定して遺構検出を行った。その結果、小型のピット5基のほか、4区で確認した掘方規模に近い略長方形のプラン1基を確認した。

掘方出土の古瓦類はまとまった量で検出され、これまで須玖岡本遺跡の各所で出土する同類の古瓦では初めて確実に遺構に伴うことで注目される調査成果となった。

弥生時代の遺構については、西側に近接する鹿野神社境内周辺で確認されている弥生時代中期以降の甕棺墓等の墳墓域が東側に伸びてくることを予測していたが、確実に同時期であると言える遺構は確認することはできなかった。ただ、ピット等調査区内からは少量ながら弥生土器片が出土しているほか、ガラス小玉1点が表土下撹乱中から出土している。したがって、今回の確認調査の結果をもって、同時期の遺構がまったく無いとは言い切れない。

2　6次調査（図版6、第3・4・6図）

3次調査の成果によって、対象地は平成14年12月に国史跡須玖岡本遺跡として追加指定を受け、平成16・17年度に公有地化を完了した。対象地の南東側史跡境界部分は、南東側史跡地外との間が落差4mを超える崖面が残り、崖下は住宅地となっている。崖面が将来的に崩壊することによる住宅地周辺への被害及び史跡の毀損を危惧することから、福岡県教育委員会及び文化庁との協議に基づき、崩壊防止のための環境整備を行うべく、史跡地の現状変更許可を得て、追加の確認調査を行った。

確認調査は、調査の目的から崖面側に幅2.8mのトレンチを背後に延ばしながら遺構の有無を確認した（6区）。その結果、3次調査で確認していた列状に並ぶ大型の掘方1基を確認した。同時に、新たに確認した掘方の他に、北東側に2基の掘方を確認した。3基の掘方は3次調査で柵列状として取り扱った並びと直交する方向であることから、この時点で掘立柱建物として追認した。念のため、3次調査で3区のサブトレンチを設定した箇所を東側に拡張したところ、同等の規模の方形プランの掘方を1基確認した（7区）。計8基の柱掘方から、3間×4間以上の掘立柱建物となる。

3　遺　構

各遺構については、3次及び6次調査合わせた成果として、以下に述べる。

（1）掘立柱建物跡

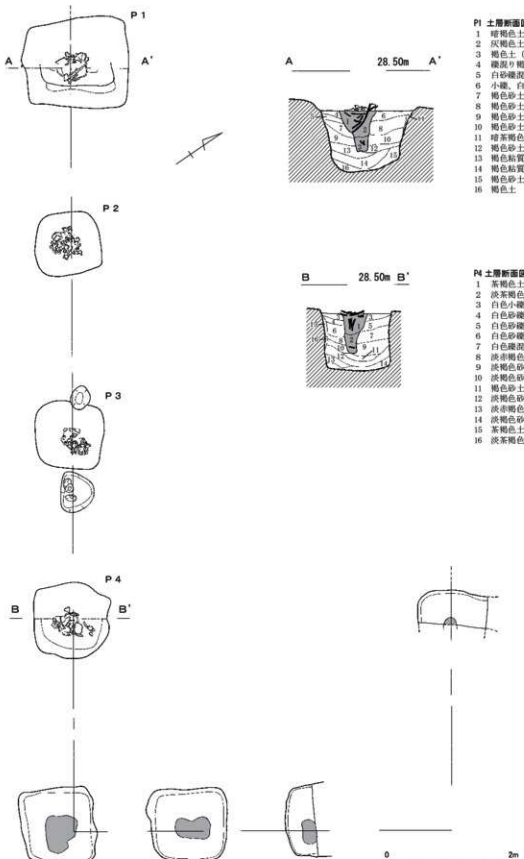
1号掘立柱建物跡（図版5、6、第4図）

主軸方向をN－50.5°－Wに振る、桁行4間以上、梁行3間の側柱建物である。

柱間の間隔は、桁行が2.95～3.2m、梁行が2m前後を測る。計8基の柱穴堀方の平面形状は隅丸方形である掘方の規模は、長軸0.75～0.9m、短軸0.65～0.9mを測る。

P1及びP4は掘方を半截し、土層断面の観察を行った。P1は土層断面から、掘方の深さ1.16mで、柱痕は深さ0.85mに留まる。柱痕径は、最深部で15cm前後を測る。柱痕跡上層は、ほぼ完形の平瓦ほか古瓦片多数が含まれ、また、断面が漏斗状に大きく広がることから、柱の抜き取りを示していると考えられる。P4は土層断面から、掘方の深さ0.97mで、柱痕は深さ0.7mに留まる。柱痕径は、

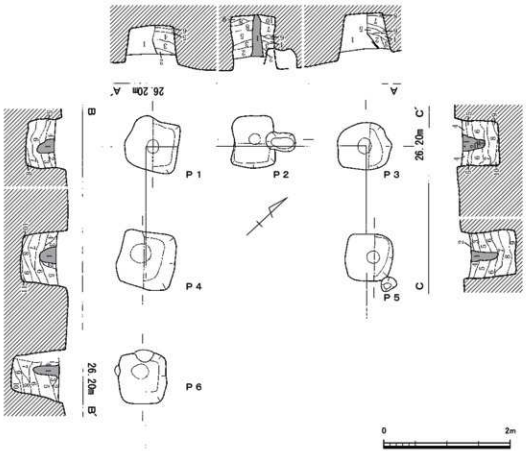
第３図　須玖岡本遺跡盤石地区３・６次調査遺構配置図（1/200）



P1 土層断面図
1 暗褐色土（白色砂土粒少混り）
2 灰褐色土
3 褐色土（暗褐色土混り）
4 礫混り褐色砂土
5 白砂礫混り茶褐色土
6 小礫、白砂礫混り褐色土
7 褐色砂土（白、灰色小礫混り）
8 褐色砂土（白、灰色小礫混り）
9 褐色砂土（白色礫、白砂礫少混り）
10 褐色砂土（白色礫、白砂礫少混り）
11 暗茶褐色砂土
12 褐色砂土（白色小礫混り）
13 褐色粘質砂土（赤茶色小礫混り）
14 褐色粘質砂土（白色小礫混り）
15 褐色砂土（白色小礫混り）
16 褐色土

P4 土層断面図
1 茶褐色土
2 淡茶褐色土
3 白色小礫混り赤褐色砂土
4 白色砂礫、赤茶色小砂礫混り赤褐色砂土
5 白色砂礫混り赤褐色土
6 白色砂礫混り赤褐色土
7 白色礫混り淡赤褐色土
8 淡赤褐色砂土
9 淡褐色砂土（白色砂礫少混り）
10 淡褐色砂土（白色砂礫少混り）
11 褐色砂土
12 淡褐色砂土
13 淡赤褐色砂土（黄色土、暗褐色土混り）
14 淡褐色砂土
15 茶褐色土
16 淡茶褐色土

第４図　１号掘立柱建物跡実測図（1/60）



第５図　２号掘立柱建物跡実測図（1/60）

P１ A-A'
1　灰茶色土
2　淡褐色土（白褐色土混り）
3　淡褐色土（淡赤褐色土混り）
4　褐色土（白褐色土混り）
5　褐色土（淡赤褐色土混り）
6　褐色土（５層よりブロック主体）

P２
1　茶褐色粘質砂土
2　淡灰褐色砂土（白褐色砂土少混り）
3　淡灰褐色砂土（白褐色砂土、茶褐色砂土混り）
4　灰褐色砂土
5　灰褐色砂土
6　茶褐色土（赤褐色砂土混り）
7　灰褐色砂土（赤褐色砂土少混り）
8　褐色砂土（茶灰色土混り）
9　淡灰褐色砂土
10　褐色砂土（茶灰色土混り）

P３
1　茶褐色粘質砂土
2　赤褐色砂土（茶褐色砂土混り）
3　茶褐色砂土
4　淡褐色土
5　淡灰褐色砂土（白褐色砂土少混り）
6　茶褐色砂土
7　灰褐色砂土
8　灰褐色砂土（茶褐色土混り）

P１ B-B'
1　灰茶色土
2　淡褐色土（淡赤褐色土混り）
3　褐色土（淡赤褐色土混り）
4　淡褐色砂土（白灰色砂土混り）
5　褐色土（暗褐色土、白灰色砂土混り）
6　褐色土（白褐色土混り）
7　褐色土（淡赤褐色土混り）
8　褐色土（５層よりブロック主体）

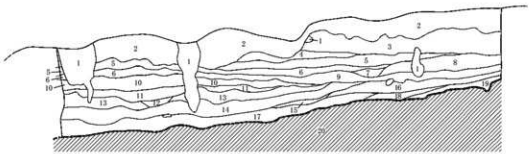
P４
1　暗褐色土（淡褐色砂礫、白灰砂礫混り）
2　淡灰褐色砂土（赤褐色砂礫少混り）
3　淡灰褐色砂土（２層よりやや暗色）
4　褐色砂土（淡褐色土少混り）
5　褐色砂土（淡褐色土少混り）
6　褐色砂土（淡褐色土混り、上層より暗色）
7　褐色砂土
8　褐色砂土
9　褐色砂土（白灰色砂礫少混り）
10　褐色砂土
11　褐色砂土（淡褐色砂礫混り）

P６
1　茶褐色粘質砂土
2　灰褐色砂土（白灰色小砂礫多混り）
3　褐色砂土
4　淡褐色砂土（白灰色砂土混り）
5　褐色砂土（白灰色砂土混り）
6　褐色砂土（白灰色砂土、暗褐色土混り）
7　褐色砂土（白灰色砂礫少混り）
8　褐色砂土
9　褐色砂土（灰茶色粘質土混り）
10　褐色砂土

P５ C-C'
1　茶褐色粘質砂土
2　褐色砂土（白灰色小砂礫混り）
3　褐色砂土（黄褐色粘質土混り）
4　褐色砂土（白灰色小砂礫混り）
5　褐色砂土（黄褐色土混り）
6　暗茶褐色砂土
7　褐色砂土（白灰色砂土混り）
8　褐色砂土（暗褐色土混り）
9　褐色砂土（白灰色砂土混り）

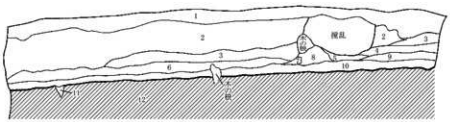
P３
1　茶褐色粘質砂土
2　赤褐色砂土（茶褐色砂土混り）
3　淡灰褐色砂土（白褐色砂土少混り）
4　灰褐色砂土（赤褐色砂土混り）
5　褐色砂土（茶褐色土混り）
6　灰褐色砂土（赤褐色砂土混り）
7　茶褐色砂土
8　灰褐色砂土
9　灰褐色砂土（暗褐色粘質砂土混り）
10　茶褐色砂土（灰褐色砂土混り）

31.00m a



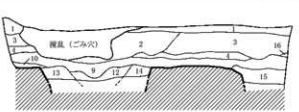
1区南壁
1 木の根および掘込み
2 暗褐色砂土（畑耕作土）
3 茶褐色砂土
5 茶褐色粘質土
6 茶褐色粘質土
7 黄褐色粘土混り茶褐色土
8 暗茶褐色粘質土
9 暗茶褐色粘質土（黄褐色粘質土混り）きめ細かい
10 黄褐色粘質土（ほとんど混りけなし）きめ細かい
1区全体には広がらないが、11層の上に貼ったような状況
11 明赤褐色粘質砂土（白色砂礫混り）※1区上層面
12 赤褐色砂土
13 赤褐色砂土（花崗岩粗質大小礫混り）
14 暗茶褐色砂土（赤褐色土、花崗岩礫少混り）
15 赤褐色砂土
16 暗赤褐色砂土
17 暗赤褐色砂土（花崗岩拳大礫少混り）
18 赤褐色砂土（花崗岩拳大礫少混り）
19 明赤褐色砂土（茶褐色土少混り）
20 赤褐色砂土（花崗岩、砂岩、珪岩、円礫混り）

28.10m b



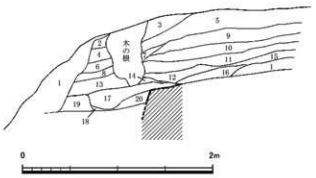
6区西壁
1 暗灰褐色土（表土）
2 褐色土
3 褐色土
4 褐色土（3より明るい色）
5 暗褐色粘質砂土
6 褐色土（3より暗い色。撹小粒、小円礫、小砂石を少量含む）
7 暗灰褐色土（しまりがない）
8 暗褐色土
9 褐色土（6に対応する）
10 暗褐色土（小円礫、小砂石を少量含む）
11 暗褐色土（小円礫、小砂石を少量含む）
12 拳大以上の円礫を多数含む明褐褐色砂土（花崗岩風化土壌の2次堆積土）

28.00m c



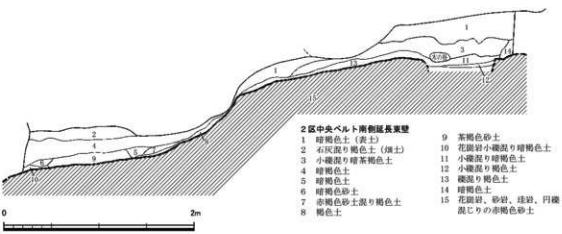
6区北壁
12 明褐色土（円礫含む）
13 橙褐色砂土（円礫混り）
14 暗褐色土（円礫混り）
15 暗褐色土＋橙褐色土
16 褐色土

28.80m d



7区南壁
1 灰褐色土（表土）
2 茶灰色土
3 灰褐色土
4 茶灰色土
5 暗灰褐色土
6 暗褐色土
7 5と同じ
8 橙褐色砂土混り茶灰色土
9 暗褐色土
10 9より明るい
11 橙褐色砂土少混り暗褐色土
12 11より暗い
13 11より暗い
14 11より暗い
15 暗褐色土
16 黒褐色土
17 白色砂混り暗褐色土
18 白色砂混り暗褐色土
19 橙褐色土＋暗褐色土
20 19より暗い

第6図　土層断面実測図①（1/40）



第７図　土層断面実測図②（1/40）

最深部で14cmを測る。Ｐ１同様に柱痕上位が漏斗状に大きく広がることから、柱は抜き取られたと考えられる。柱痕跡中に古瓦片を多く含む。掘方の立柱時の埋土は、Ｐ１、４ともに、５～20cmの厚みで層状に埋め戻している。

２号掘立柱建物跡（図版３、４（１）・（２）、第５図）

１号掘立柱建物跡の南東側約９ｍにある。約７°のズレはあるが、１号建物の棟方向とほぼ合っている。主軸方向をＮ－43°－Ｗに振る、桁行２間以上、梁行２間の側柱建物である。柱間の間隔は、桁行が1.7～1.85m、梁行が1.64～1.75mを測る。計６基の柱穴掘方の平面形状は概ね隅丸方形である。堀方の規模は、長軸0.75～0.9m、短軸0.65～0.9m、深さ0.63～0.88mを測る。柱痕跡は、径0.18～0.28mを測る。６基とも掘方を半截して土層断面を観察した。柱痕が掘方底まで達するのは棟柱の掘方であるＰ２のみである。

堀方Ｐ３から平瓦片が出土した。

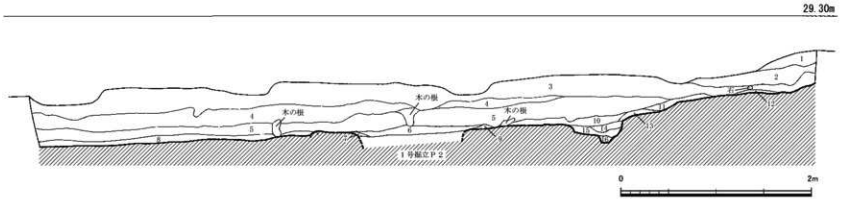
（２）溝状遺構

１号溝状遺構（第３図）

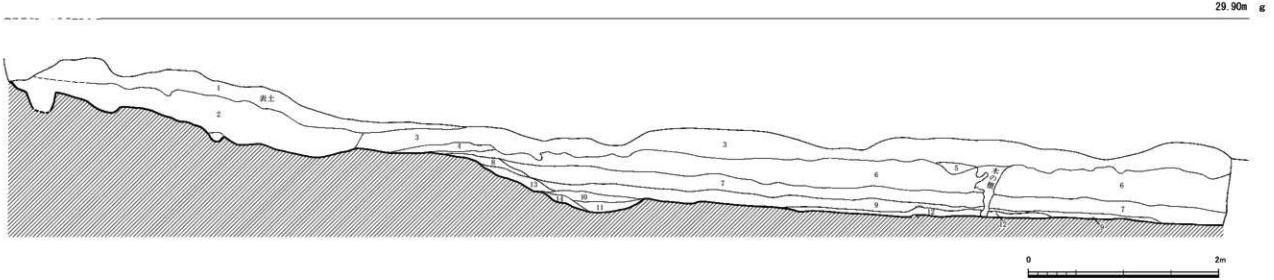
１号掘立柱建物の南西側に長さ14m以上にわたり、並行して走る。１号建物の南西側をすぐに丘陵の斜面が立ち上がり、溝の西側肩は斜面から掘り込んでいる。幅0.8～2.1m、深さ0.08～0.3mを測る。また、溝の東側の肩付近に計19個の小径のピットが密に並ぶように検出された。トレンチ土層断面の観察から、溝及び小ピットは中世以降の掘り込みと考えられる。

２号溝状遺構（第３図）

６次調査の６区で確認された。１号溝よりも西側のさらに斜面上位を、１号溝とほぼ平行して走る。長さ１ｍ以上、幅0.17～0.2m、深さ0.09～0.2mを測る。

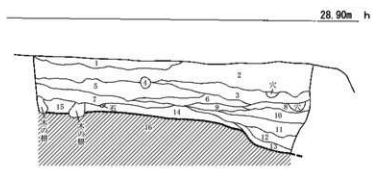


2区中央ベルト東壁
1 淡茶褐色土（客土）
2 暗褐色土（客土）
3 暗褐色土（須耕作土）
4 茶褐色土（上層）
5 茶褐色土（下層）
6 暗茶褐色土
7 茶褐色土
8 円礫少混り暗茶褐色土
9 茶褐色砂土
10 円礫少混り褐色砂土
11 褐色砂土
12 褐色土（小礫混り）
13 暗茶褐色土
14 茶褐色砂土
15 茶褐色土

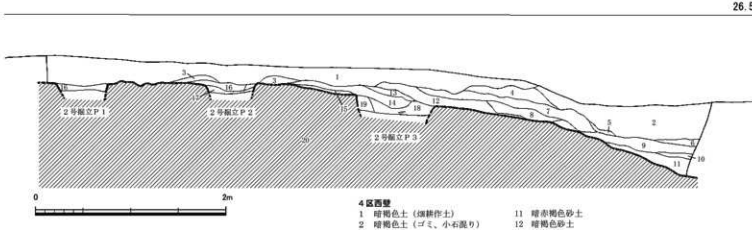


試掘 2トレンチ西壁
1 灰褐色土（表土）
2 下層ゴミだらけの赤褐色砂土（下層にゴミを多く含む）
3 暗褐色土（須耕作土）
4 暗灰土混り暗茶褐色砂土
5 褐色土
6 茶褐色土
7 茶褐色土
8 暗茶褐色砂土
9 暗茶褐色土
10 暗茶褐色砂土（やや粘質、白色砂礫混り）
11 茶褐色土（橙色礫混り）
12 円礫混り暗茶褐色土
13 暗茶褐色土（白色小礫混り）
14 茶褐色土（白色小礫混り）

第８図　土層断面実測図③（1/40）

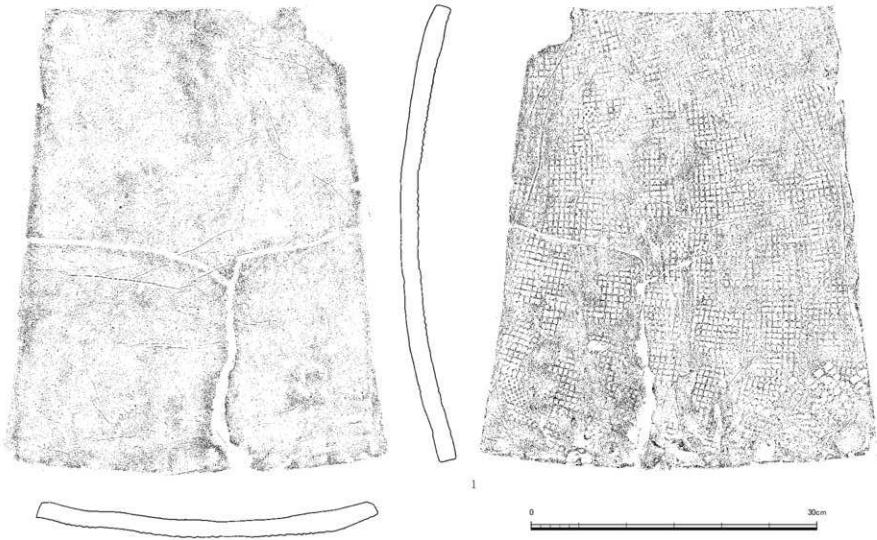


3区西壁
1 暗褐色土＋腐葉土敷（畑耕作土）
2 暗褐色土
3 茶褐色土（ボソボソ，炭混り）
4 濃褐色土
5 茶褐色土
6 茶褐色土
7 暗茶褐色土
8 暗茶褐色土
9 暗褐色土
10 黒褐色土混り暗褐色土
11 黒褐色土（砂粒多い）
12 黒褐色土
13 暗褐色土混り橙褐色土
14 礫混り橙褐色土
15 礫混り橙褐色土
16 花崗岩、砂岩、硅岩円礫混りの茶褐色砂土（地山）

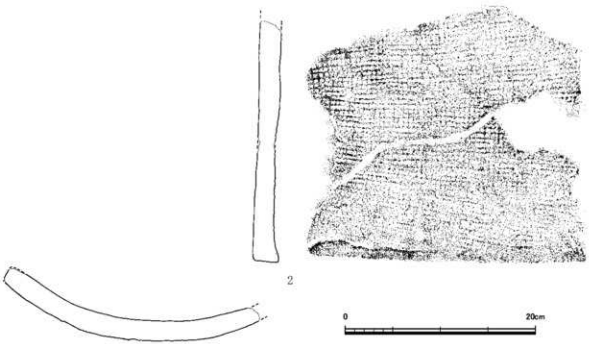


4区西壁
1 暗褐色土（畑耕作土）
2 暗褐色土（ゴミ、小石混り）
3 褐色土
4 暗褐色砂土
5 暗褐色砂土
6 暗灰褐色土
7 暗褐色土
8 褐色砂土
9 暗褐色土
10 暗褐色土
11 暗赤褐色砂土
12 暗褐色砂土
13 褐色砂土
14 暗褐色土（白砂混り）
15 赤褐色砂土混り暗褐色土
16 暗褐色土
17 暗茶褐色土
18 暗茶褐色土
19 茶褐色土
20 赤褐色粘質土（地山）

第９図　土層断面実測図④（1/40）



第 10 図　平瓦実測図① (1/4)



第 11 図　平瓦実測図②（1/4）

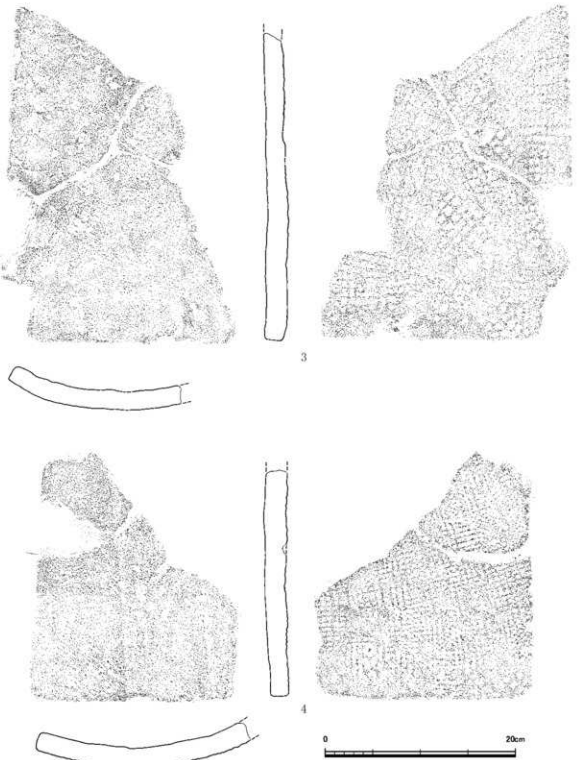
4　出土遺物

（1）瓦

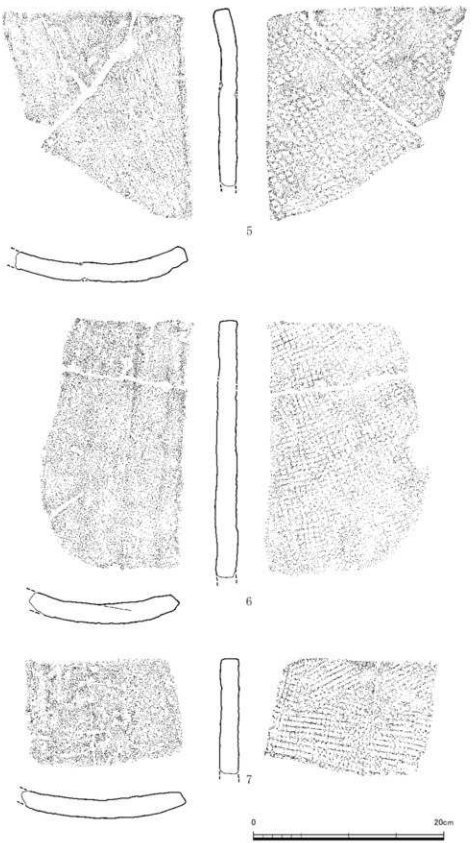
3次調査ではパンコンテナ 10 箱分の瓦が出土しているが、本報告では製作技法や文様が特定できる状態の良い平瓦 45 点（ 1 ～ 45）、丸瓦 5 点（46 ～ 51）、軒丸瓦 6 点（52 ～ 57）について取り上げる。

今回出土した平瓦は、いずれも桶巻き造りである。桶巻き造りは、布を巻いた桶の外面に粘土を貼り付け、文様が刻まれた叩き具を用いて凸面全体の厚みを均等になるよう成形し、ヘラで粘土板を分割して桶から離脱する技法である。平瓦の凸面には、叩き締めの際についた痕跡が文様となって確認される。文様は3種類で、4～6㎜の正格子目と9～13㎜×6～8㎜の長方形格子目、平行タタキ目である。多くは叩き締め成形後、部分的にナデ調整を施す。凹面には連続する円弧状の条線が観察され、糸切痕と考えられる。ナデ消されたものや、摩滅したものもあるが凹面全体でみられることから、桶に貼り付ける粘土は、粘土塊から糸切によって切り離した粘土板を使用していたと考えられる。糸切痕に重複して布目痕及び、模骨状の桶板の痕跡が認められる。模骨痕は幅 3.2 ～ 5 ㎝の凹凸が瓦の長軸に平行する。凹面、凸面とも、桶から離脱後に部分的にタタキ、ナデまたはケズリによる表面の調整を行い、一部の瓦では端部や側面に面取りを施す。

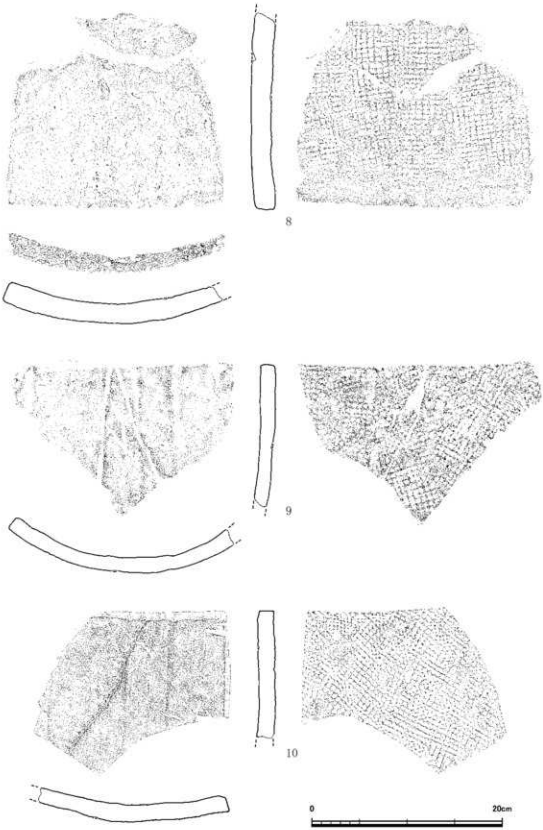
丸瓦はいずれも行基式丸瓦である。凹面には幅5～6㎜の凹凸が連続することから細い棒状のものを賓状に連結した竹状模骨の使用が想定できる。竹状模骨の場合、連続する凹凸に直行して紐状の痕



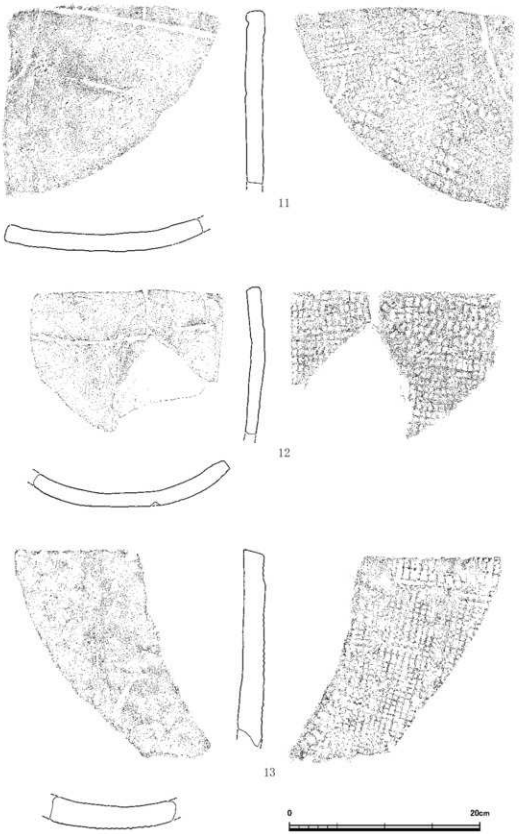
第 12 図　平瓦実測図③（1/4）



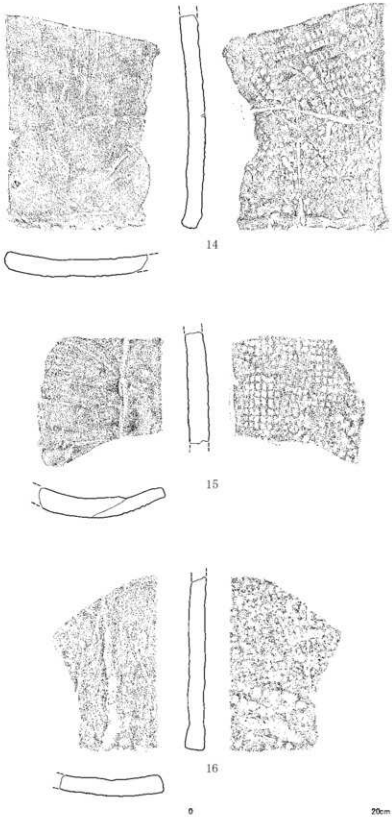
第 13 図　平瓦実測図④ (1/4)



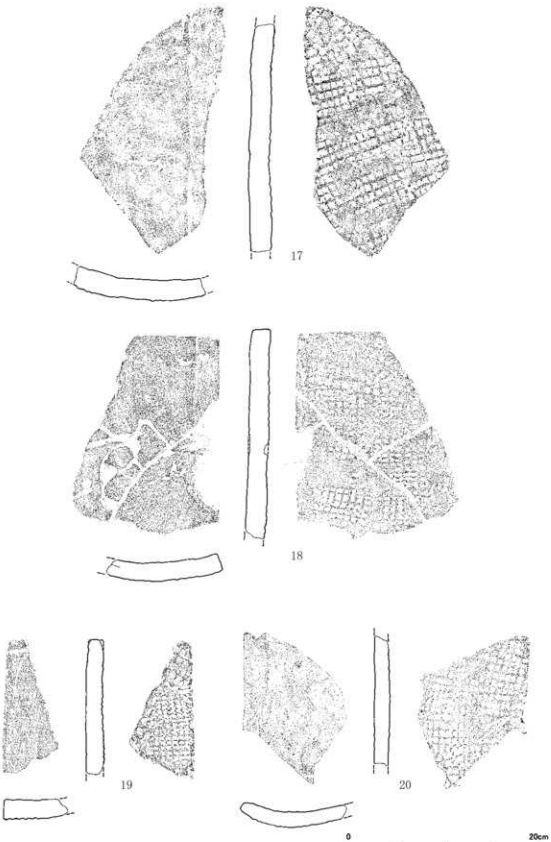
第 14 図　平瓦実測図⑤（1/4）



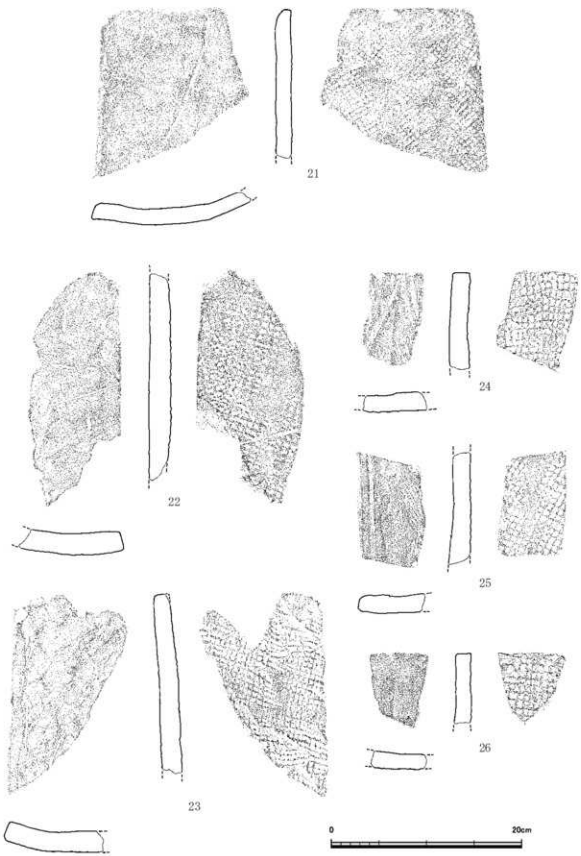
第 15 図　平瓦実測図⑥ (1/4)



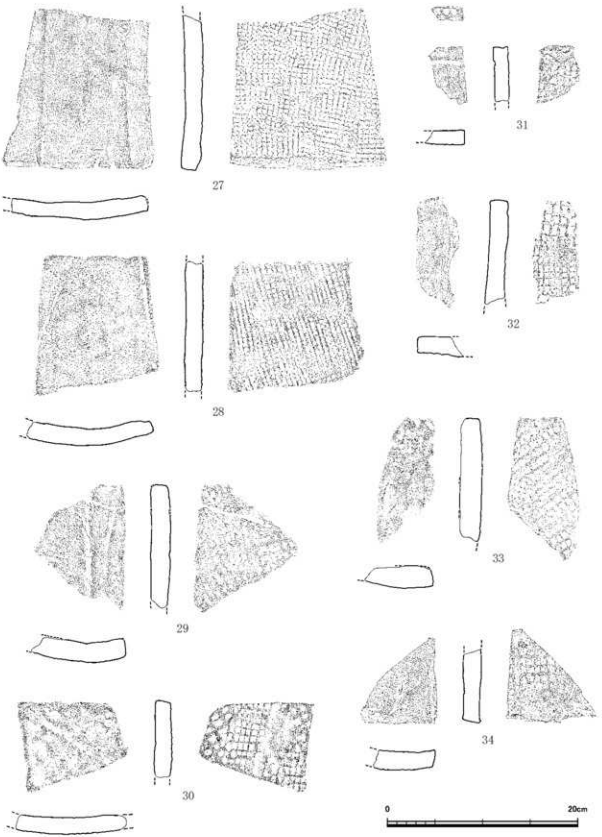
第 16 図　平瓦実測図⑦（1/4）



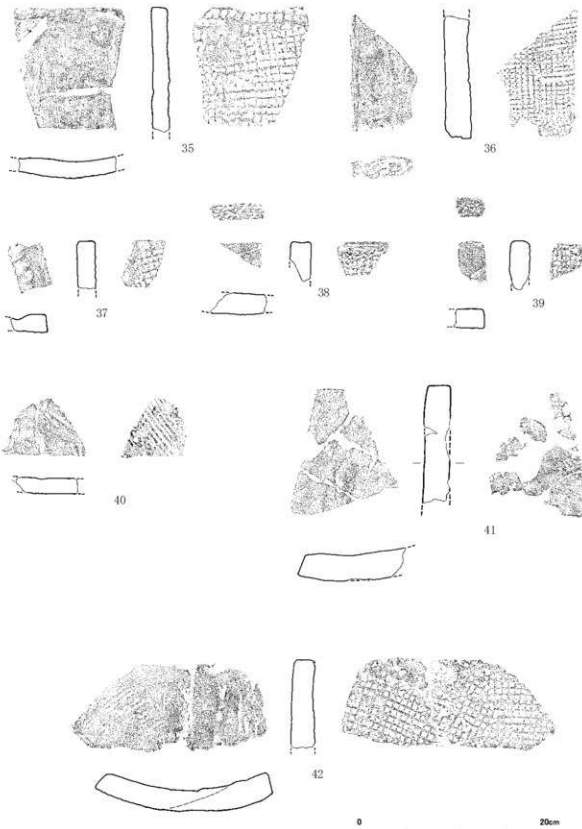
第 17 図　平瓦実測図⑧ (1/4)



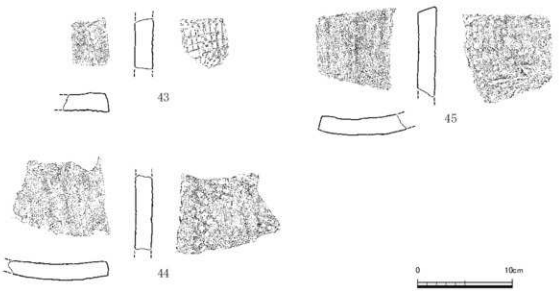
第 18 図　平瓦実測図⑨（1/4）



第 19 図　平瓦実測図⑩ (1/4)



第 20 図　平瓦実測図⑪ (1/4)



第 21 図　平瓦実測図⑫（1/4）

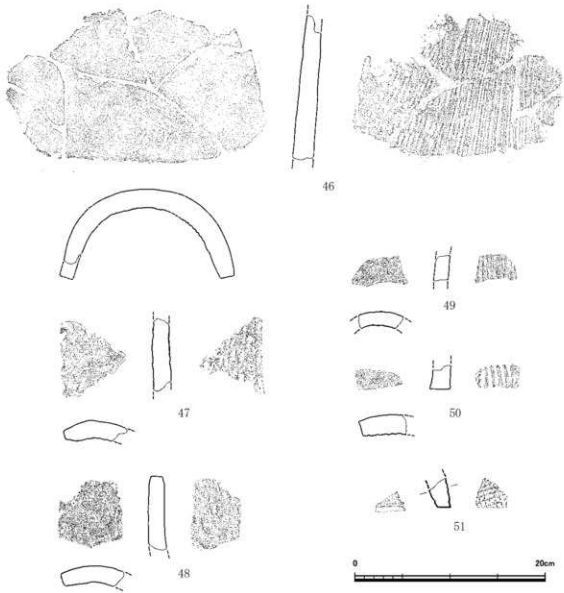
跡が見える場合もあるが、残存している丸瓦の範囲では確認できない。丸瓦はヘラ切で半裁し、竹状模骨から離脱する。側面部に面取りを行っている資料も見受けられた。

軒丸瓦は、いずれも百済系単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、瓦当外縁に重圏文を巡らせる。瓦当は行基式丸瓦に接合する。蓮子は 1 + 6 。瓦当面の厚みは外縁部でも 1.7 ㎝と薄い。丸瓦との接合面は平坦で凹面側に厚く粘土を補填しナデ調整を施す。

平瓦（第 10 ～ 21 図、図版 7 ～ 13）

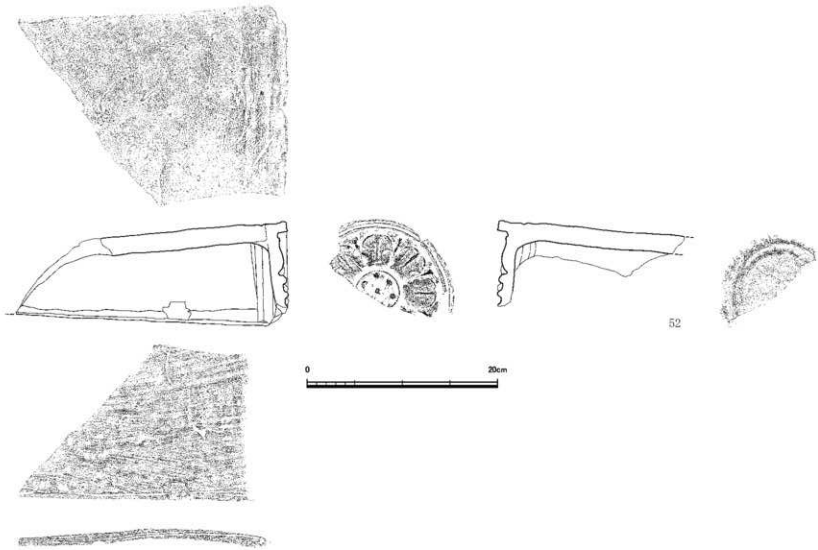
平瓦は 1 ～ 45 だが、 1 以外は破片資料である。個々の詳細な記述は避け、製作工程等の抽出を目的に、製作時の特徴を有する瓦の指摘を中心に行いたい。

瓦は黄灰白色～橙褐色、褐色を呈する軟質から瓦質のものと、灰～暗灰褐色を呈する須恵質のものに大別できる。前者は厚さが 2 ㎝以上なのに対し、後者は 2 ㎝以下である。若干、須恵質の方が造りの粗い印象はあるが、製作工程上の違いは確認できなかった。端部に並行する破断面では粘土の継ぎ目が観察できる。（6 、15、17、18、42）。継ぎ目の断面形状は、15、42 はＺ型である。15 は粘土を継いだ後ナデ調整している。凹面は、 1 、 3 ～ 5 、 8 ～ 10、13 ～ 19、21 ～ 29、31、32、34 ～ 40、42、43、44、45 で糸切の痕が残る。16、19、27 は側面間に並行して連続するが、他は広端部と狭端部間で条線が平行ないし斜めに連続する。 1 ～ 6 、 9 、17 ～ 19、22 ～ 29、34 では、桶板による幅 3.2 ～ 5 ㎝の押圧痕跡が認められる。桶板に伴う紐の痕跡も 1 、 5 、 8 、11、12、24、31、34、35、40 で観察できる。紐の圧痕は幅 5 ～ 9 ㎜前後で瓦端部の直下 3 ～ 6 ㎝にほぼ並行して 1 条が残る。比較的大きな破片である 11 では 8 ㎝下にさらに 1 条の圧痕が認められる。瓦の凹面は製作工程で突出した部分にナデ調整を施すものが多い。凹面全体にヘラ削りを行った 12、20、23、41、43 以外の資料には、布の織り目が残る。布目は 1 ㎜以下と細かい。また、15、16、28、29、42 には布を桶に巻き

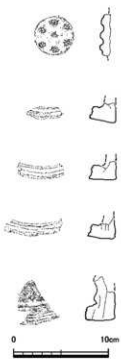


第 22 図　丸瓦実測図（1/4）

付けた際の縫い目が残り、そのうち 29 では約 1.2 ㎝幅の縫い代でまつり縫いを行った痕跡を観察できる。23 と 41 は凸面、凹面、端部面、側面とも最終的に丁寧にナデ調整を施す。全手の面にナデ調整するのはこの２点のみである。３、５、10、12、21、27、44 は端部に、１、３、５、６、10、12、14、15、20、21、25、27、28、44 は側面部で面取りを確認した。凸面側に面取り調整を行っているのは 14、27 のみである。27 については凸面側端部の面取り後に正格子タタキを施す。端部の調整では、31、38 は端部ヘラ切後に端部面に正格子目タタキを施しており、特に 38 は凸面の叩きを含め丁寧にナデ消した上から施される。成形時のタタキ締めは凸面全体に行われ、その後、部分的にナデ調整を施している。叩き締めは４～６㎜の正格子目タタキを円弧状に移動しながら施すが、１、３、４、11、13、32 では、凸面全体に５㎜前後の正格子目タタキを施した後、桶から瓦を離脱して長方形格



第 23 図　軒丸瓦実測図① (1/4)



第 24 図

軒丸瓦実測図②（1/4）

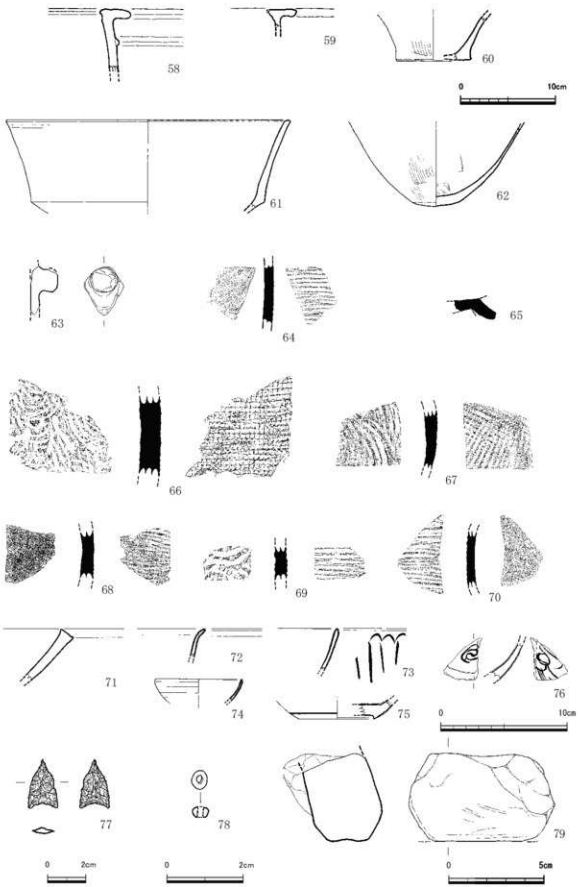
子目タタキを補足的に加えている。40 は正格子目後に平行タタキ目を施す。42 は端部側でタタキ後に粘土を継ぎ足した痕跡が認められる。この粘土の上から施されたタタキ目はないため、桶から離脱後、もしくは乾燥後に行った補修と考えられる。この他、凸面では２で紐状の圧痕、35 で部分的な布目、８、14、34、36 で変形した端部面に植物質等の圧痕が観察できるが、これらは偶発的についたものと考えられる。

丸瓦（第 22 図、図版 14）

丸瓦は、46 ～ 51。全て破片資料で、端部・側面部両方が残る資料は 48 と 50 のみである。このうち 48 と 46 以外は須恵質である。48 は特に焼成が甘く摩滅気味であり、６点のうちで唯一内面をナデ消しているため竹状模骨の使用の有無は不明である。51 も破片が小さいため不明。他の丸瓦は、凹面で幅５㎜前後の長軸方向に並行する凹凸が連続して見受けられることから、竹状模骨の使用が想定できる。46 は凹部中央から右半分に糸切の痕跡が観察されるため、丸瓦も平瓦同様に粘土塊から糸切により切り出した粘土板を使用したと想定できる。47、49 ～ 51 の凹面には平瓦同様、幅１㎜で織られた布目が残り、一部強いナデ調整を施す。凸面は丁寧にナデ調整がされるため、叩き具の痕跡は確認できない。竹状模骨からの切り離しはヘラ切で行われ、47 は側面部の凹面側を面取りする。50 は凸面に並行タタキ、51 は正格子タタキを施す。

軒丸瓦（第 23、24 図、図版 14、15）

軒丸瓦は 52 ～ 57 である。いずれも須恵質の百済系単弁八葉軒丸瓦の破片資料である。52 は丸瓦部 1/4 と瓦当面の 1/2 が残存する。瓦当面は、瓦当復元径 16.2 ㎝、中房径 4.3 ㎝を計る。蓮子数１＋６、八葉の単弁の間には逆三角形の間弁を配する。間弁の長さは花弁の中ほどまで達する。周縁部幅は 1.1 ～ 1.3 ㎝で二重圏文を飾る。蓮弁は先端部が反転し、弁形は大きく丸い。花弁間に一部指頭圧痕が残るが最終的な調整時に偶発的についたものと思われる。瓦当面の厚さは７～ 1.7 ㎜と薄い。瓦当面と丸瓦端部の接続面は、面取り等の加工は行っておらず、凹面側に粘土を補填しナデ調整を行う。また、凸面側にも２～３㎜程度の厚みで粘土を塗り付け、瓦当面から約５㎝までヘラ状工具による横方向の強いナデ調整を施す。瓦当面に接続する丸瓦は行基式丸瓦で凹面は竹状模骨の痕跡が観察される。糸切による切り離し痕と布目も確認できる。側面部はヘラ切で、凹面側に面取りを施す。凸面側は全体に丁寧なナデ調整を行っており、タタキ痕は確認できない。53 は中房のみ残存する。やや歪んでおり直径 4.3 ～ 4.5 ㎝を測る。直径と蓮子の配置が一致することから 52 と同范の可能性が高いが、53 は 42 と比べて凹凸が甘い。54 ～ 56 は周縁部である。いずれも二重圏文で幅は 54 が 1.2 ㎝、55・56 が 1.3 ㎝である。57 は周縁部と間弁の一部が残存する。間弁の先端は 52 より短い。52、54 ～ 56



第 25 図　土器・陶磁器・石器・ガラス小玉・土製品実測図（1/1・1/2・1/3・1/4）

と比べ瓦当面が厚く約1㎝の厚みがある。断面に幅約7㎜の粘土接合痕が確認できるが、范型に粘土を充填した際の痕跡と考えられる。

（2）土器

58～60は弥生土器。58は、遺構検出時出土の甕の口縁部破片。逆L字形の口縁で、口縁下に三角凸帯を貼付する。59は、1号土坑プラン検出時出土の甕の口縁部小破片。逆L字形の口縁。60は遺構検出時出土の甕の底部破片。

61、62は土師器。61は、遺構検出時出土の口縁部の小破片。壺あるいは高坏か。62は、鉢あるいは小型の甕の底部**破片。外面はわずかにハケ**目が残る。内面には工具による調整痕がわずかに残る。63は遺構検出時出土の土師器質の把手状の小片。淡橙褐色から淡褐色の色調を呈する。胎土に径0.5～2㎜の砂粒を含む。焼成は良好である。64～70は須恵器。64は1号溝状遺構出土の甕の胴部小片。65は遺構検出時出土の壺の底部の小片。高台は外に大きく張る。66は表土中出土の甕の胴部小辺。67～70は遺構検出時出土の甕胴部の小片。

71は、2号溝状遺構出土の土師質土器の鉢口縁部の小片。橙褐色から淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。

（3）陶磁器

72～76は陶磁器。72は撹乱中から出土の青磁碗の口縁部小片。胎土は淡灰色で、微細な砂粒を少量含む。釉はガラス質で透明感がある。淡緑灰色を呈する。龍泉窯系碗Ⅳ類。73は2区9層出土の青磁碗口縁部の小片。外面に菊花化した蓮弁文が施される。胎土は淡灰色で、微細な砂粒を含む。光沢がある薄い淡緑灰色の釉がかかる。74は2区9層出土の白磁の小碗の小片。胎土は灰白色で、微細な砂粒をやや含む。光沢のあるガラス質の釉がかかる。75は4区の19層出土の青磁坏の底部の小片。胎土は淡灰白色で微細な砂粒をやや含む。光沢のあるやや黄味のある淡緑灰色の釉がかかる。龍泉窯系坏Ⅳ類の碁笥底タイプ。76は2号溝状遺構出土の青磁碗体部の小片。内外面ともに片彫りの花文が施される。胎土は緻密で淡灰白色を呈する。灰緑色の厚い釉がかかり、ガラス質で光沢感がある。

（4）石器

77は2区7層出土の打製石鏃の完形資料。表面は灰色を呈する。安山岩製。

（5）ガラス製品

78は5区の撹乱中から出土したガラス小玉。外径は4～4.8㎜、厚さ2.8㎜を測る。色調はマリンブルーで気泡が目立つ。

（6）土製品

79は2区4層出土の不明土製品。外側に踏ん張る厚みのある脚台部の破片。内外面ともに被熱している。胎土は微細な白色砂粒や赤色粒子を僅かに含むが精製されている。淡橙色を呈する。

Ⅳ　まとめ

弥生時代の遺構について

今回の調査範囲では、弥生時代と言える確かな遺構は確認できていない。しかし、出土遺物としては、表土下の撹乱土中からガラス製小玉１点が特記できる内容であろう。

今回の調査地点の周辺部での調査成果を省みると、此処から西方 40m の盤石地区１次調査（須玖岡本遺跡　旧 10 次調査）では２基の甕棺墓が検出され、北西向きの丘陵斜面で、小児棺１基、成人棺１基を確認している。同調査地点周辺は、地元聞き取りによると、この他に多数の甕棺が出土している。[註1] また、此処から北北西 50m の盤石地区５次調査では、丘陵北向きの緩斜面の包含層に甕棺破片が含まれていることから、甕棺墓の存在する可能性が指摘されている。[註2] さらに、南西 40m の熊野神社境内と隣接する岡本公園での岡本山地区６次調査では、弥生時代の遺構として甕棺墓８基、溝状遺構を確認している。このうち、溝状遺構は中期前半の複数の甕棺墓に伴う周溝とし、墳丘墓の可能性を指摘している。[註3]

よって、調査地点の周囲では墳墓群が展開することは明らかであり。今回の調査地点も弥生時代の墳墓がなお潜在していることは否定できない。

歴史時代以降の遺構について

今回の調査で注目すべき点は、瓦をともなう掘立柱建物２棟が確認されたことである。一棟は３間×４間以上で大型の柱穴掘方を有する建物。もう一棟は２間×２間以上の建物である。特に１号建物は、抜き取り後の柱痕中に多量の瓦を含んでいた。出土瓦については、百済系単弁八葉蓮華文軒丸瓦、丸瓦、平瓦が含まれ、出土量はパンコンテナ 10 箱相当になる。軒丸瓦については、須玖岡本遺跡地内のほか、同遺跡の南西 500m の赤井手遺跡からの出土資料と同一型式と考えられる。建物の時期については、須恵器等の時期の明らかな出土土器が伴っていないが、百済系単弁八葉蓮華文軒丸瓦の福岡平野における年代観から、一応７世紀後半から８世紀にかけての時期としたい。

最後に、建物造築の背景についてだが、今回確認した２棟の建物は北東向きの丘陵斜面上にかなり近接して建てられている。１、２号建物は棟行きの方向をほぼ同じにしながら、約 9m の間で約 2.5m の比高差のある斜面上にある。百済系単弁軒丸瓦を使用する建物であることから、官衙的性格を帯びた建物であることは間違いないことであろうから、さらに同調査地点の近辺にかなりの数の関連建物群の存在が予測されよう。現段階で建物群の性格を具体的に追求するのは難しそうだが、調査地点から眼下に見下ろす北東方向 80 ～ 100m の丘陵裾部付近に、水城跡西門を起点として鴻臚館跡へ北進する官道の通過地点が推定されていることから、建物群は官道に関連する官衙的性格を有する施設であることを予測したい。

註１ 春日市教育委員会　1995『須玖岡本遺跡』春日市文化財調査報告書第 23 集
註２ 春日市教育委員会　2006『春日市埋蔵文化財年報』13
註３ 春日市教育委員会　2000『春日市埋蔵文化財年報』９

平瓦観察一覧表

No.	全長(cm)	最大幅(cm)	厚み(cm)	胎土	色調	焼成	面取数	凹面	凸面	備考
1	28.6	19.5	2.1~2.5	2mm以下	灰白~灰色	やや軟	側面2	糸切痕→布目痕・桶板痕(幅5cm前後)・紐状圧痕→ヘラ削り	正格子タタキ(4mm前後)→部分ナデ→長方形格子タタキ(9mm×7mm)	タタキ原体2種類
2	27.2	27.3	2.4	2mm以下	淡橙褐色	やや軟		摩滅気味、桶板痕(幅4cm)	正格子タタキ(4mm)，不定方向の紐状圧痕	
3	32.2	18.1	1.9~2.2	1mm以下	灰白色~褐色	やや軟		糸切痕→桶板痕(幅3.2~3.3cm)	正格子タタキ(4mm)→部分ナデ→長方形格子タタキ(7×10mm)	タタキ原体2種類あり
4	23.8	23.5	2.0~2.3	5mm以下	灰白色~淡茶褐色	やや軟		糸切痕→桶板痕(幅4.5cm前後)	正格子タタキ(4mm)→部分ナデ→長方形格子タタキ(6×9mm)	
5	22.1	15.1	2	4mm以下	淡橙褐色~橙褐色	やや軟	2	糸切痕→桶板痕、不定方向の紐状圧痕→ナデ	格子タタキ→部分ナデ	一つの原体に5mmの正格子と6×8の長方形格子目が混在
6	27	15.9	1.9~2.3	1mm以下	灰白色~淡橙褐色	やや軟	1	糸切痕→布目痕、桶板痕(幅3.7~4cm)、紐状圧痕	正格子タタキ(4mm)	粘土板接合痕(S)，側面凸面側面取り
7	12.1	17.4	1.9~2.2	0.5mm以下	灰白色~淡褐色	やや軟		桶板痕	正格子タタキ(5mm)	
8	20.9	20.7	2.4	3mm以下	灰白~茶褐色	やや軟		布目痕、桶板痕	正格子タタキ(5mm)，端部側はタタキ後3cm幅で強いナデ	端部面に正格子タタキ
9	15	23.6	1.6	1mm以下	灰白~暗灰色	良		桶板痕(幅4.1cm)	正格子タタキ(4mm)	須恵質
10	15.4	20.2	1.9	1mm以下	灰~暗灰色	良	2	糸切痕→布目痕、桶板痕(幅5.5cm)	正格子タタキ(4mm)	須恵質
11	18.1	20.1	2	2mm以下	灰白色~淡橙褐色	やや軟		糸切痕→布目痕、桶板痕(幅4.2cm)，紐状圧痕2条	正格子タタキ(5mm)→部分的に長方形格子タタキ(8×1.2mm)→部分的にナデ	瓦質
12	15.4	20.7	1.4	1mm以下	灰色~青灰褐色	良	1	糸切痕→紐状圧痕→ヘラ削り，ナデ	正格子タタキ(5mm)	須恵質，粘土板接合痕
13	20.7	13.2	2.4	1mm以下	灰白~淡褐色	やや軟		糸切痕→紐状圧痕→ナデ	正格子タタキ(5mm)→部分的に長方形格子タタキ(7×1.3mm)	
14	22.4	15	1.8	1mm以下	灰色	良	2	布目痕→ヘラ削り	正格子タタキ(6mm)→長方形格子タタキ(7×4mm)→一部ナデ	須恵質 端部変形、植物質圧痕
15	11.8	14.2	2	1mm以下	灰白色~褐色	やや軟	1	糸切痕→布目痕、綴じ紐痕→ナデ、ヘラ削り	正格子タタキ(5mm)	粘土板接合痕(Z)
16	18.2	10.9	1.6~1.9	2mm以下	(凸)淡黄褐色 (凹)淡橙褐色	軟		糸切痕→綴じ紐痕	正格子タタキ(5mm)→部分的に長方形格子タタキ(8×1.2mm)	
17	23.7	14.2	2.4	1mm以下	灰白~淡茶褐色	やや軟		糸切痕→桶板痕→ヘラ削り	正格子(0.7mm)→部分的にナデ	粘土板接合痕(S)
18	21.9	12.2	2.2	1mm以下	淡橙褐色	やや軟		桶板痕(幅5cm)→ヘラ削り	正格子(5~6mm)	粘土板接合痕
19	14.1	6.8	2	1mm以下	灰褐色	やや軟		糸切痕→桶板痕(幅3.3cm)，紐状圧痕、布目痕	格子状タタキ	
20	13.7	11.2	1.6	1mm以下	(凸)淡橙褐色 (凹)淡青灰色~灰色	良	1	布目痕→ヘラ削り	正格子タタキ(6mm)→正格子タタキ(9mm)	
21	17.5	16.8	2	2mm以下	灰白色~黄茶褐色	やや軟	2	糸切痕→布目痕	正格子タタキ(5mm)	摩滅気味
22	21.9	11	2.3	1mm以下	淡橙褐色	やや軟		ヘラ削り	正格子タタキ(5mm)→部分的ナデ	
23	18.8	10.6	2	1mm以下	淡褐色	良		糸切痕→ヘラ削り，ナデ	正格子タタキ(5mm)	端部面、側面部面も丁寧にナデる
24	10.7	8	1.6	1mm以下	(凸)青灰色, (凹)暗青灰色, (断)橙褐色	良		糸切痕→桶板痕、布目痕(綴合せ縛り紐痕か)	長方形格子タタキ(4mm~7×6mm)	同じ原体にサイズの異なる格子がある
25	8.3	7.1	1.7	1.5mm以下	褐灰色~暗青灰褐色	良		布目痕、桶板痕、紐状圧痕→ヘラ削り	正格子タタキ(5mm)	
26	11.8	7.1	2.2	1.5mm以下	赤褐色~暗青灰褐色	良	両2	糸切痕→布目痕、ヘラ削り	正格子タタキ(5mm~4×6mm)	同じ側面部の凹面、凸面両側で面取り，粘土板接合痕
27	16.4	16.9	2.1	5mm程度	灰白色~青灰褐色	良	1	糸切痕→桶板痕(幅4.5cm)，布目痕	正格子タタキ(4~5mm)	端部凸面側はヘラ切後正格子タタキ
28	14	13	1.9	2mm以下	灰白色	軟		糸切痕→桶板痕(幅4.2cm)，布目痕	正格子タタキ(5mm)	凹面側に斜めに走る段差(布の折目か?)
29	13.8	10.6	2.2	2mm以下	灰白~淡橙褐色	軟		糸切痕→桶板痕、布目痕(綴合せ縛り紐痕か)	正格子タタキ(7mm)	1.2cm間隔でまつり縫い
30	9.6	11.6	1.9	1mm以下	白黄色~黄灰褐色	やや軟		摩滅	長方形格子タタキ(6×8mm)→正格子タタキ(7mm)→ナデ	
31	6.3	4.4	1.6	1mm以下	青灰色~茶褐色	良		糸切痕→紐状圧痕	正格子タタキ(7mm)→ナデ	端部面にヘラ切後，正格子タタキ
32	11.7	4.5	2.3	2mm以下	青灰色	良		布目痕→ヘラ削り	正格子タタキ(5mm)→長方形格子タタキ(7×10mm)	
33	15	7.8	2.3	2mm以下	白黄褐色~灰褐色	やや軟		摩滅	正格子タタキ(7mm)	
34	9.6	9.4	2	2mm以下	(凸)淡青灰色 (凹)黒褐色	良		糸切痕→桶板痕、布目痕、紐状圧痕	正格子タタキ(7mm)→部分的にナデ	端部に植物質の圧痕
35	13.1	12.3	1.8	1mm以下	暗青灰色	良		糸切痕→桶板痕、布目痕、紐状圧痕2条→ナデ	正格子タタキ(8mm)→ナデ、部分的に布目	
36	12.8	7.8	2.7	2mm以下	灰白色~褐色	やや軟		横方向ヘラ削り	正格子タタキ(5mm)	端部ヘラ切後、乾燥段階で地面に置いたため器面が荒れる
37	4.9	3.8	1.9	1mm以下	暗青灰色	良	1	布目痕→指頭圧痕	正格子タタキ(6mm)	
38	4.9	6	2.2	0.5mm程度	黄褐色	良		ナデ	正格子タタキ(4mm)→ナデ	端部面にヘラ切後，正格子タタキ
39	5.2	3.4	2.1	0.5mm程度	黄茶褐色	良	1	ナデ	正格子タタキ(4mm)	端部面にヘラ切後，正格子タタキ

No.	全長(cm)	最大幅(cm)	厚み(cm)	胎土	色調	焼成	面取数	凹面	凸面	備考
40	6.6	8.6	1.8	1mm以下	青灰色～淡茶褐色	良		植板痕、布目痕→ナデ	正格子タタキ→平行タタキ	断面、粘土板接合痕か。
41	14	11.4	2.8	1mm以下	にぶい赤褐色	良		ヘラ削り	タタキ→ヘラ削り	隅角の角度が105°前後、隅切り瓦の一種か。
42	9.5	21.5	2.5	1mm以下	暗褐色	良	2	布目痕→ヘラ削り	正格子タタキ	粘土板接合痕、端部の凸面側に粘土継ぎ足し
43	5.3	4.7	1.9	1mm以下	青灰色	良		植板痕、布目痕→ナデ	長方形格子タタキ(5×7.5mm)	
44	8.8	10.9	1.9	2mm以下	(表)暗青灰色 (裏)青灰色	良		植板痕、布目痕→ナデ、ヘラ削り	正格子タタキ(6mm)→長方形格子タタキ(5×9mm)	
45	10.7	10	1.9	2mm以下	黄橙褐色	やや軟		植板痕(幅3cm)、布目痕	摩滅気味、正格子タタキ(5mm)	

丸瓦観察一覧表

No.	残存長(cm)	残存最大(cm)	厚み(cm)	胎土	色調	焼成	面取数	凹面	凸面	備考
46	15.1	18	2.35	1mm以下	褐色	良好		糸切→布目、竹状模骨→部分的ナデ	丁寧なナデ	
47	7.6	7.7	1.9	1mm以下	(表)暗灰色 (裏)灰褐色	良好	1	布目、竹状模骨→部分的ナデ→面取り	タタキ→ヘラ削りサ→ナデ	
48	7.7	6.6	1.8	3mm以下	暗褐色 (断面)黒褐色	やや軟	1	竹状模骨	ナデ	摩滅気味
49	2.6	4.7	1.4	1mm以下	(表)黒褐色～灰灰色 (裏)褐色～暗灰色	良好		布目、竹状模骨	タタキ→ナデ	
50	2.5	5	2	1mm以下	暗灰色	良好		布目、竹状模骨	平行タタキ	
51	3.2	3.5	2	1mm以下	(表)灰白色 (裏)灰色	良好	1	布目（組合せ跡り縁痕か）	正格子タタキ(4mm)	

軒丸瓦観察一覧表

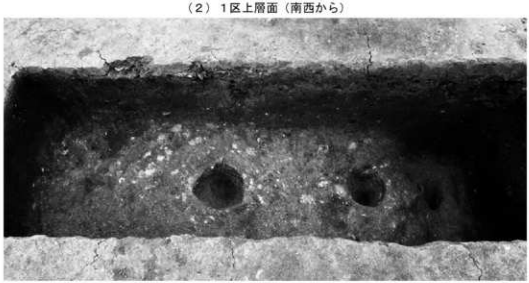
No.	直径(復元)	内区（cm）						外区（cm）		色調	焼成	備考
		中房径	蓮子数	蓮子径	弁区内径	弁幅	弁数	外縁広	外縁高			
52	16.4	4.3	1+6	0.9	3.8	3.3	9	1.1～1.3	1.1	暗青灰色	良	二重圏文、間弁(1.6～2cm)、丸瓦は行基式竹状模骨
53								1.3～1.4	1.3	灰～暗灰色	良	二重圏文
54								1.35	1.7	灰～暗灰色	良	二重圏文
55								1.35	1.4	灰～暗灰色	良	二重圏文
56								1.4	1.5	灰～暗紫灰色	良	二重圏文、間弁(長1.65cm)

図　　版

調査区全景（上が北西）

（１）１区調査区東壁土層（北西から）

（２）１区上層面（南西から）



（３）３区調査区（南西から）

（１）４区調査区全景（北西から）

（２）２号掘立柱建物跡Ｐ３（東から）

（３）２号掘立柱建物跡Ｐ２土層状況（南東から）

（４）２号掘立柱建物跡Ｐ１土層状況（東から）

（５）２号掘立柱建物跡Ｐ５土層状況（北東から）

（１）２号掘立柱建物跡Ｐ４土層状況（北東から）

（２）２号掘立柱建物跡Ｐ６土層状況（北東から）

（３）４区拡張前調査区西壁土層（南東から）

（４）５区調査区全景（上が北東）

（１）２区南側延長トレンチ東壁土層（北から）

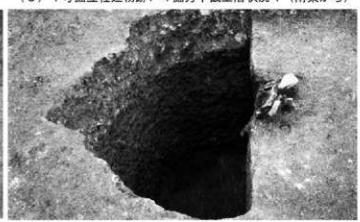
（２）１号掘立柱建物跡Ｐ１（北東から）

（３）１号掘立柱建物跡Ｐ１掘方半截土層状況（南東から）

（４）１号掘立柱建物跡Ｐ４（北東から）

（５）１号掘立柱建物跡Ｐ４掘方半截土層状況１（南東から）

（６）１号掘立柱建物跡Ｐ４掘方半截土層状況２（南東から）



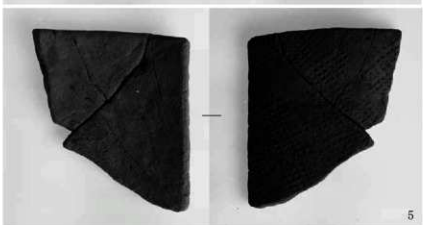
（７）１号掘立柱建物跡Ｐ４掘方半截状況（北東から）

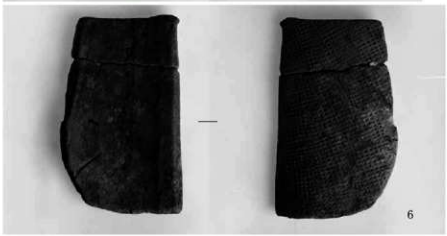
（１）６区南側調査区全景（北西から）

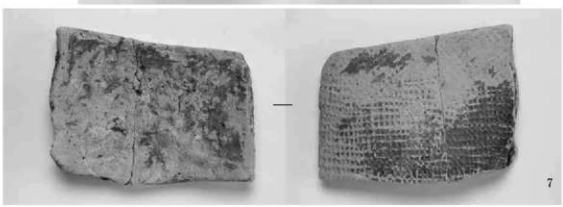
（２）７区北側調査区全景（北西から）

（３）７区北側調査区東壁土層（北西から）

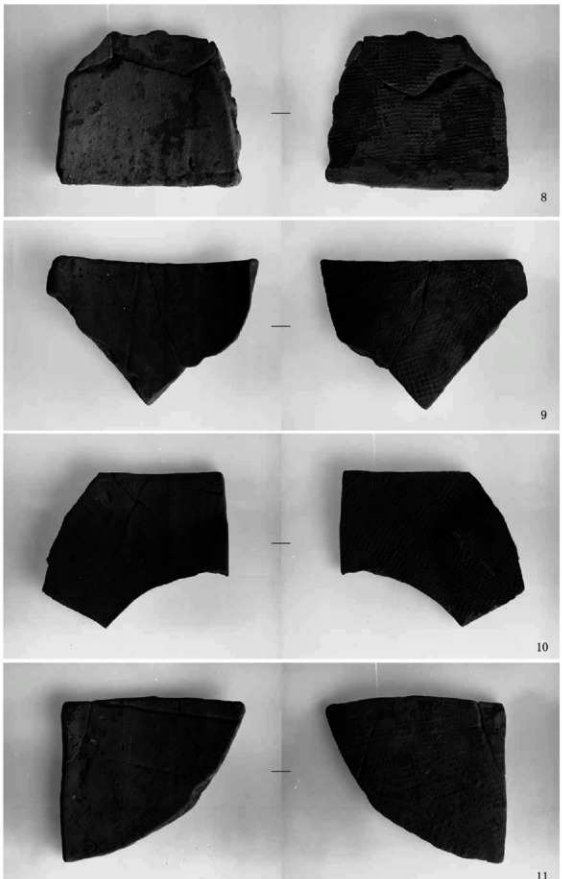
平瓦 1



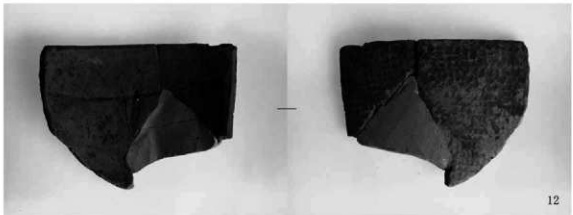


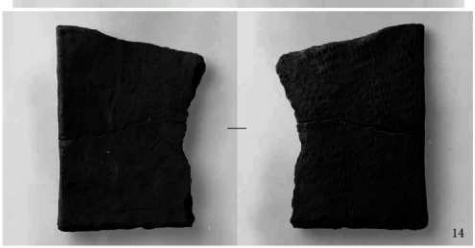


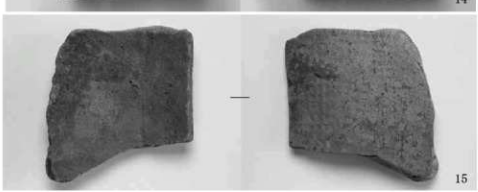
平瓦２



平瓦３

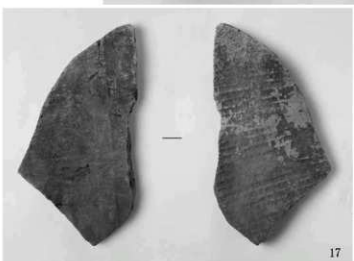


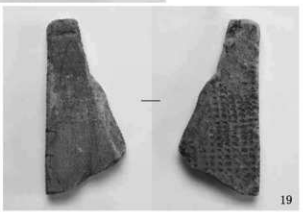


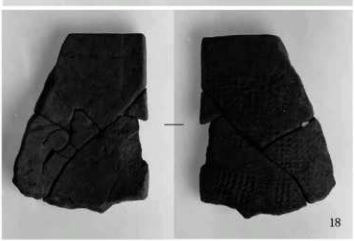


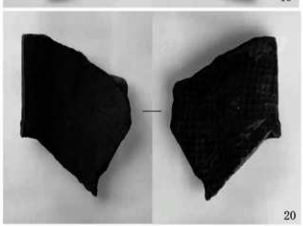
平瓦 4

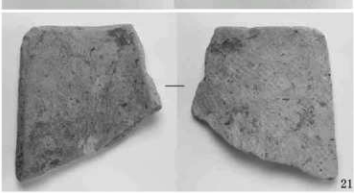
16

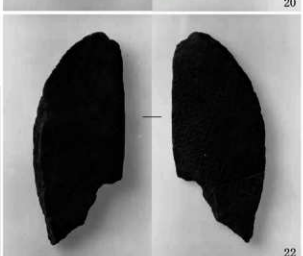

17


19


18

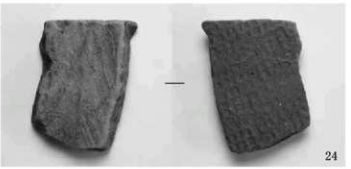

20

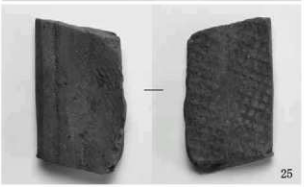

21

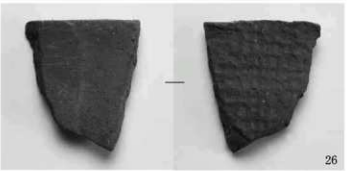

22

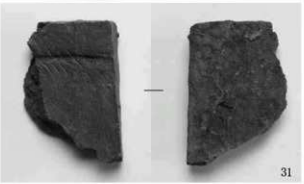
平瓦5

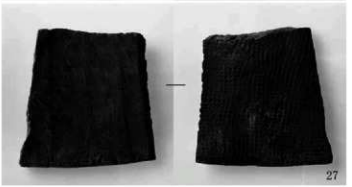
23

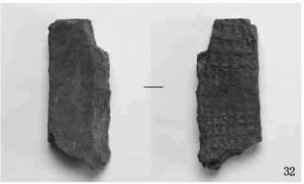

24

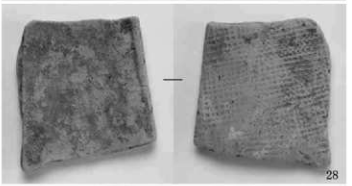

25

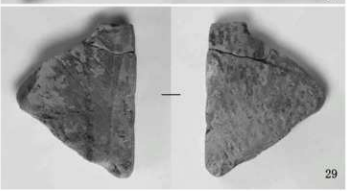

26


31

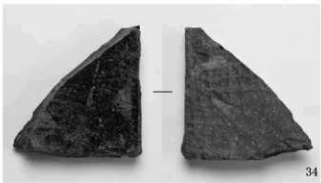

27

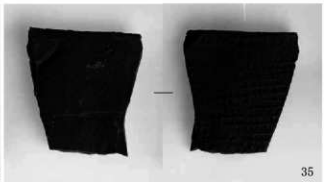

32

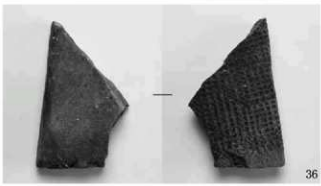

28

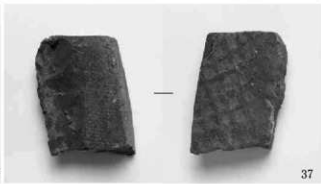

29

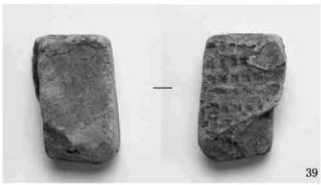
平瓦 6

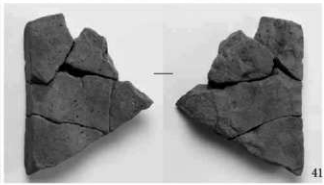

34

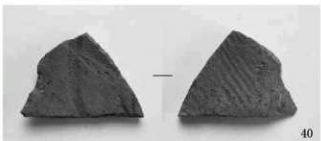

35

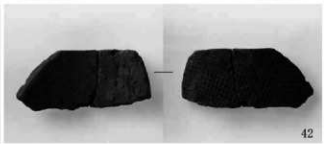

36

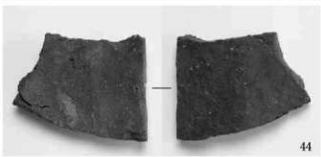

37

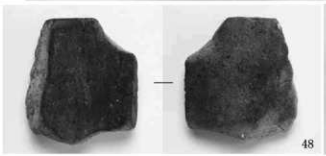

39

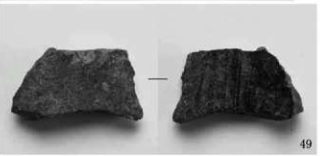

41

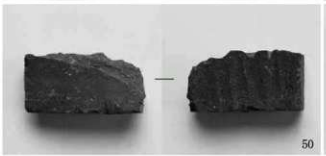

40

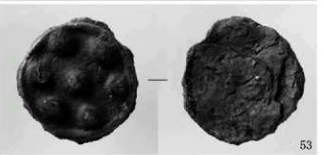

42

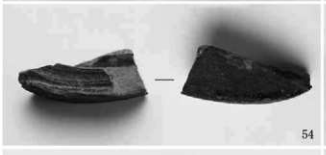

44

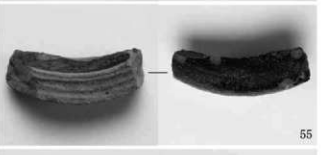












丸瓦・軒丸瓦

赤井手遺跡出土軒丸瓦

軒丸瓦

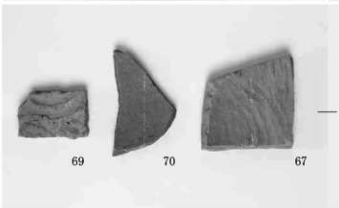
59

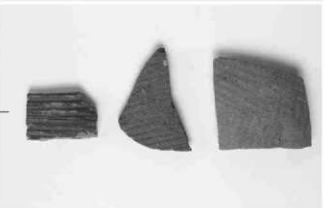
60

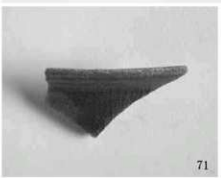
63

61

62


69 70 67

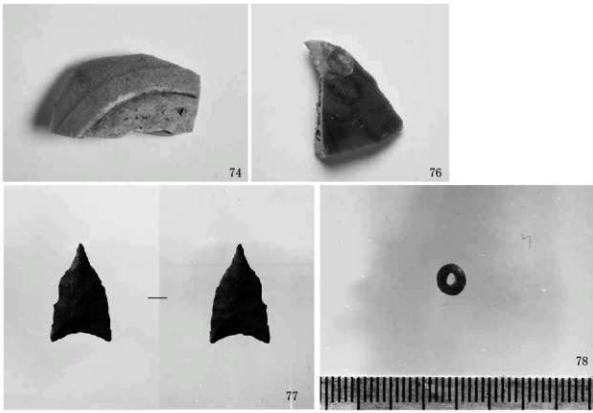



71

72

73

土器・陶磁器



陶磁器・石器・ガラス小玉

報告書抄録

ふりがな	すぐおかもといせき７　ばんじゃくちく３・６じちょうさ
書　　名	須玖岡本遺跡７　盤石地区３・６次調査
副 書 名	福岡県春日市岡本所在遺跡の調査
巻　　次	
シリーズ名	春日市文化財調査報告書
シリーズ番号	第81集
編 著 者 名	中村昇平、森井千賀子、山崎悠郁子
編 集 機 関	春日市教育委員会
所 在 地	〒816-0804　福岡県春日市原町３丁目１番地５　TEL　092-584-1111
発行年月日	2019年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村番号	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
須玖岡本遺跡 盤石地区 ３・６次調査	福岡県春日市 岡本２丁目 80、81番	40218		33° 32′ 24″	130° 26′ 54″	３次 2002.2.4 ～3.29 ６次 2006.10.23 ～11.10	３次 135.0㎡ ６次 37.5㎡	重要遺跡確認調査現状変更申請による確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
須玖岡本遺跡 盤石地区 ３・６次調査	官衙か	飛鳥時代	掘立柱建物跡	百済系軒丸瓦、丸瓦、平瓦	

要　　約

須玖岡本遺跡盤石地区での発掘調査。３次調査は史跡指定前の重要遺構確認調査、６次調査は対象地東側崖面の崩壊防止のための環境整備工事に先立ち、史跡の現状変更許可による確認調査。

丘陵の北東向き斜面で掘立柱建物２棟を確認した。２棟とも柱掘方から古瓦を確認。同地点の北東100m前後を水城跡西門を通過する推定官道ラインが想定されており、瓦を使用する建物は官道に関連する施設の可能性が考えられる。

須玖岡本遺跡 7

―盤石地区３・６次調査の報告―

春日市文化財調査報告書　第81集

2019年3月31日

発　行　春日市教育委員会
福岡県春日市原町３丁目１番地５

印　刷　大道印刷株式会社
福岡県春日市日の出町６丁目23